詩とポピュラリティー
大学で身体に気づいてもらうための仲介

講師　阿部公彦
講師　　原成吉
講師　四元康祐
司会　諏訪友亮

シンポジウム趣旨

本シンポジウムの企画は、女子大に勤める諏訪のゼミで3年間も詩を志望する学生がゼロだったという恥ずかしい事実から始まっている（ほとんどが映画研究を志望）。当初は、詩がいかに（不）人気であるかについて歴史的経緯をひもとき、詩が敗れ去ってきたいつもの物語を語る会を構想していたものの、前向きな講師3方とのミーティングを経て、大学における新たな詩の授業の可能性について考えるシンポジウムへ生まれ変わることになった。「詩とポピュラリティー」というタイトルは、詩と読者、詩と社会の付き合いまで範囲に収めるものだが、今回は各講師が日々関わる大学生に対象を絞ることにした。

3人の授業方針や受講する学生の様子を聞くたび、彼らの初心者向け授業には、(1) 身体的要素や創作を授業に取り込む、(2) 詩の背景・文脈の過剰な提示を避ける、という2つの類似があることに気づく。講師たちは、E・E・カミングス作品の視覚的興奮、朗読時の舌使いの意外性にこだわるなど、大学生に五感と身体を通じていかに作品を体験してもらうかに注力しているのである。本シンポジウムは、詩の授業法についての実践例でもあることから、『教室の英文学』（日本英文学会関東支部編、2017年）の続編とも言ってよいだろう。

作品の背景と文脈の過剰な提示は、言い換えれば、大学内で前提にされてきた教養主義がどれほど強固であるかを物語っているが、近年はそのほころびが著しい。日本の教養主義研究は、主に学生の読書傾向を社会学的に分析することで行われてきており、読書こそが学生の教養（英語 culture、独語 Bildung）、すなわち人格を形成するとの歴史的経緯に基づいている。しかし、データとしてはやや精度に欠けるとはいえ、大学生協が毎年公表している学生の読書調査によれば、1日の読書時間が0分である大学生の割合が、1990年から20年間ほどは3割に保たれていたものの、2013年頃を境に4割を突破すると現在は5割を超えている（恐ろしいことに、このサンプルデータは、国立大学が7割以上を占めるという点で、学力上位の数値でもある）。1日の読書時間が30分未満、30〜60分未満の中間層も30年間で明らかな減少傾向にあり、学生とは読書するものであるという教員側の願いが成り立たなくなっている。『教室の英文学』が1つの範を仰ぐ MLA の *Approaches to Teaching World Literature Series* も、1980年の発刊から現在の改訂版に至るまで、文献リストを示す Part 1 : Materials、それに基づく授業モデルの提案である Part 2: Approaches という書籍の構成は維持され、背景重視であることに変わりがない。こうした、作品の裏側にある興味深い文脈を示してあげれば、学生は自ずと読書へ導かれるだろう、という教員の淡い期待は、読書慣れしていない日本の学生に対する誤った思い込みなのではないだろうか。

本シンポジウムは、初手から背景と文脈で押していく授業のアプローチとは異なり、講師3名の授業にある、身体的要素や創作の取り込みに改めて光を当てるものである。詩の声、言葉のリズム、視覚の面白さ等、非意味の部分に大学1・2年生が気づきを得られるようにするにはどうすればよいのか。文学への興味から将来的には教養へ向かってもらうためにも、教養を時に一旦回避して、身体的な体験の機会をいかに作りだせるか。むしろ詩をはじめとした文学の授業は、そうした体験の提供にうってつけではないのか。本シンポジウムは、そうした問題意識から出発している。

以下では、簡単に講師の方々の発表を振り返りたい。

「甘い言葉」は信用できませんか？
大学の教室で詩の甘美さと出会う方法（＆その効用）

阿部公彦

阿部氏は「詩を読むときのハードル７選」として
１．ストーリー性がなく、引き込まれない。何をおもしろがっていいか、わからない。２．難しい。ちんぷんかんぷんだ。
３．暗い。読んでいて気が滅入る。
４．長い。飽きる。
５．短い。「え？もう終わり？」となる。
６．鬱陶しい。自分で自分に酔っているように見える。いい気になっていて、こちらが恥ずかしくなる。
７．甘い。歯が浮く。嘘っぽい。
を挙げ、今回は「７．甘い。歯が浮く。嘘っぽい」を取り上げた。

阿部氏によれば、長らく詩の重要な要素であった甘さが、その実は対となる毒や苦さなどとセットで提示され、詩が単純に甘さだけを感じさせるわけではないとする。しかも、甘さと毒は朗読の際の舌の動きと直接結びついており、言葉を味覚的にも味わうことが、現代では遠ざけられがちな甘い言葉の受容を考え直すきっかけになるのではないかとする。その例が、Christina Rossetti, *Goblin Market* であり、ゴブリンの売る果物が、誘惑や性的抑圧といったファミニズム的テーマとしても読める一方で、口の中で繰り出される音とリズムの快楽が、言葉は食すものであることを思い起こさせるという。

英語話者が口元を見て言葉を判断していることを示唆する「マガーク効果」が紹介され、日本語話者は会話の際にほとんど口元を見ていないことが指摘される。口の身体性への注目は、英語のリスニングやスピーキング向上の手がかりになるのみならず、詩を味わうことを考えるヒントになる。

アメリカ詩を教室へ届ける 13 の方法

原成吉

原氏は E. E. Cummings、Billy Collins、Gary Snyder の作品を通して、教室で詩から意味を搾り取ることの危うさを説いた。Cummings の “l (a”は、単純に意味を読み取ろうとすれば、“loneliness (a leaf falls)”となり、葉の一片が木から落ちる様を描いたことになる。しかし、原氏はそれではつまらないと言う。冒頭の“l”は、「一人の私」とも数字の１とも読めるし、“af / fa”はアルファベットが逆さになって対照的に配置されていることから、葉が宙を舞うのを可視化したものであり、最後の “iness”は“i-ness”、つまり「わたくし性」とも読めるとする。単なる一つの意味に還元できない視覚詩を、まさに絵画を眺めるかのようにじっくり解きほぐしていくことが試されているのである。

さらに Billy Collins の“Introduction to Poetry”は、教室で詩を読む時の「やっていいこと・悪いこと」であるとされる。ミツバチの巣箱に耳を押し当てるように詩に耳を澄ませ、迷路に落ちたネズミが動き回る様子を観察するかのように詩を何度も思索する。著者の伝記的事実を当てはめるのではなく、著者という存在に敬意が払われればいい。しかし、近年の学生がそうであるように、実際に行われているのは、詩を椅子に縛りつけ、本当の意味＝読み方の正解を吐かせることであり、詩を意味や意図の合理性に従属させる読み方ではないだろうか。Gary Snyder の“How Poetry Comes to Me”が示唆するように、詩は人間の住む理性の世界ではなく野性の側にあり、詩人が野性との境界に赴くことで詩は出来あがる。詩を意味によって完全に理解できるというのは錯覚であり、あれやこれやの試行錯誤を通して、教室で詩を幾重にも感じる方法が実践された。

教室に詩の野性を放つ

四元康祐

四元氏は、久方ぶりに東京をベースに活動し、詩作やイベントの企画、出版に携わる傍ら、大学で詩の授業を教える中で気づいたことがあると言う。それは、こちらから問いかけても学生たちは能面のようにしか反応せず、一方で彼らが他人からの評価や承認を極度に欲する飢餓感に苛まれていることだった。就職先を早くから気にかけ、経済的効率性に自ら絡め取られていく大学生たちが、むしろ追い詰められていることに驚いたそうだ。

しかし、教室で詩人たちの作品を読み、互いに自作の詩を発表する授業を経て、学生の顔が活き活きするのを見るにつれ、四元氏は閉塞感のある日本の学生たちには、詩の言葉こそが必要なのではないかという思いに至る。現に、学生たちはこちらが求める以上の数の作品を喜々として提出してくる。その成果が、大学で詩を教える詩人たちの授業から生まれた『インカレポエトリ』という同人詩誌であり、ここから詩の新人賞である中原中也賞に選ばれる若手も現れてきた。現在の日本に生きる学生たちが、彼らの日常にはなかった言葉との付き合い方を見つけるためにも、教室で詩を分かち合うことは有効ではないだろうか。最後に、四元氏は授業の一環として学生と始めた連詩において、彼らに送った自らの発句「教室の詩」を朗読、満場の拍手で迎えられた。

参考文献

Collins, Billy. *The Apple that Astonished Paris.* U of Arkansas P, 1996.

Cummings, E. E. *Complete Poems 1904-1962.* Liveright, 1991.

Menninghaus W, Wagner V, Hanich J, et al.“The Distancing-Embracing model of the enjoyment of negative emotions in art reception.” *Behavioral and Brain Sciences* 40 (2017), 1-15.

Retallack, Joan and Juliana Spahr. *Poetry and Pedagogy*. Palgrave Macmillan, 2006.

Rossetti, Christina. *The Complete Poems*. Ed. by R.W.Crump. Penguin, 2001.

Snyder, Gary. *The Gary Snyder Reader.* Counterpoint, 1999.

Travis, Peter W. and Frank Grady, eds. *Approaches to Teaching Chaucer's Canterbury Tales*. MLA, 2014.

Tryphonopoulos, Demestres P. and Ira B. Nadel, eds. *Approaches to Teaching Pound's Poetry and Prose*. MLA, 2021.

Tucker, Herbert F.“Rossetti's Goblin Marketing: Sweet to Tongue and Sound to Eye.” *Representations*, 82-1 (Spring 2003), 117-133

全国大学生活協同組合連合会『第 31 回学生の消費生活に関する実態調査報告書』1996 年

---. 「学生生活実態調査の概要報告」（https://www.univcoop.or.jp/press/index.html）

竹内洋『教養主義の没落』中公新書、2003 年

千葉雅也『勉強の哲学』文藝春秋、2017 年

筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波現代文庫、2009 年

日本英文学会（関東支部）編『教室の英文学』研究社、2017 年

（文責：諏訪）